

## スポーツ界のことを語る前に

河野 梨香

私たちはいかに無意識に男女の性的な役割分担を教え、教えられてきたか。これを見つめ直すことが日本のスポーツ界発展の力手をつとめることです。

現在、米国でスポーツ心理学を学んでいます。様々な形で日米を比較していますが、その過程において日頃から感じていることを少し述べたいと思います。

## 見つめ直そう私たちの言動

日本のスポーツ界に対してWSFジャパンが働きかけていることは様々で、困難な事からも数多くあると思います。が、スポーツ界のみならず、まず、社会の中の基本問題を皆さんに考えていただきたいと思っています。

次の問題に答えてください。①貴方の友人の子供が四歳の誕生日をむかえます。プレゼントをあげるとしたら何を選びますか。②貴方の五歳の息子が隣の女の子にいじめられ、泣いて帰ってきました。どのような言葉かけますか。

私が意図したことがわかりでしようか。①では子供の性別がわからないため何を選ぶか迷うでしょう。一般的には男児へのプレゼントとしてスポーツグッズ、自動車などの玩具を与えるのに対し、女児にはかわいい縫いぐるみや人形などが与えられる傾向があります。

ます。色別では青系統が男児で、ピンク系統が女児に多い色です。

②についても性別で引っかけられます。「男が女に泣かされた！」と情けなく思いましたか？ 様々な反応があるでしょうが、一般的には子供が泣いて帰ってくると、男児には「男の子は泣かないで相手を殴り返してやるぐらいでないとだめでしょ！」と叱り、女児には「よし、よし、可哀想にこっちへおいで」とあやす傾向が強いのです。では、なぜ男児に縫いぐるみではいけないのでしょうか、なぜ、男の子が泣いてはいけないのでしょうか？

この話は教育心理で頻繁に引用される例で、いかに我々が歴史の中で作られてきた「男女の社会的役割とその性格」を当てはめて行動しているか、を考える問題です。この世に生まれたその直後から、人は性的な区別をあらゆる場面で受け、そして自分が学習した「常識」を自分の子供へしつけ直しているのです。しかし、時代は変化し、昔からの「常識」は徐々に通用しなくなってきました。特に米国ではこの問題に対して学校教育を中心に人々の考えを変革してきました。

## 日常社会での古典的男女の役割分担

日本ではどうでしょうか。周囲の大人がいかに無意識に性的な役割分担を子供に教えているか、皆さんは考えたことがありますか。このように育てられた子供は自然と「男性は××であるべき」「女性は〇〇なのだ」と一方だけの性的な性格や役割の固定観念を持ちます。米国ではかなり前から敏感にこの問題に対応しています。例えば、絵本で男女の性的差別描写はなくされ、消防士、トラックドライバーそして工事現場で働く女性も登場します。

ベムという心理学者は「心身共に健全な人間とは、両性の特徴を兼ね備え状況に応じてうまく言動を使い分ける者」といっています。私も同感です。日本では親が子に与える言動は一方の性的役割を担い過ぎ、結果として男女各々の甘えや無責任さが出ていると思います。性的役割についての固定観念が明確で、かつ男性優位の社会で教育を受けた人は、米国での女性進出等の状況を耳にしてもそれは異常でやり過ぎと思う人が少なくないと思います。自分や相手の置かれている様々な優位

さ不平等さに対し、無神経で理解できません。社会学者バーナードの「たとえ両者の置かれている状況が同じであっても、男性と女性が経験していることは全く違うのだ」ということなど理解できません。これらを理解できない人には、WSFジャパンがスポーツ界に対して働きかけていることを「どうしてわざわざそんなことするの？」としか受け止められないと思うのです。「弱い」、「自信がない」、「依存願望が強い」などの日本女性の形容詞は女性自身を変えていくものです。日本男性の「横柄」「強い」「言動が及ぼす影響への無責任さ」を変えらるのもやはり、女性と子供の教育から変えていかなくてはならないと思います。

繰り返しますがスポーツ界のことを語る前に、自分が受けてきた教育と現在、自分が子供にしている教育をもう一度見なおし、改めていくことが必要だと思えます。それが近い将来、日本の社会をして日本のスポーツ界をさらに発展させる第一歩となると思います。へかわのりか W S F ジャパン 会長員 ミシガン州立大学博士課程在学中。スポーツ心理学専攻